

自己愛的脆弱性が家族機能の認知に与える影響

—自己愛的脆弱性サブタイプによる検討—

17004PCM 小山 洋

I. 問題

上地・宮下 (2009) がわが国の臨床現場で会う自己愛パーソナリティには、過敏・脆弱なタイプが多いと述べている。過敏型自己愛は自己評価が低いために、日常生活の出来事がネガティブに捉えられ、現状に対して否定的評価を重ね、ストレス反応が増加することが指摘されている (清水・岡村・川邊, 2010)。

上地・宮下 (2005) は Kohut の自己心理学の視点から自己愛的脆弱性尺度を作成している。そして、上地・宮下 (2009) は承認・賞賛過敏性、自己顕示抑制、潜在的特権意識、自己緩和不全の自己愛的脆弱性尺度の短縮版 (以下、NVS 短縮版) を作成した。自己愛的脆弱性とは心理的安定を維持する機能の脆弱性であり、他者から期待した承認や賞賛がなかったときに、非常に傷つき、自尊感情が低下し、抑うつ的な傾向のことである (上地, 2015)。上地・宮下 (2009) は自己愛的脆弱性が対人恐怖傾向に影響を与え、不安、緊張、うつ気分などの症状が多くなることを示唆した。

そして、神谷・岡本・高野 (2013) は NVS 短縮版を用い、大学生を自己愛的脆弱性の状態により類型化した。脆弱群、自己緩和不全群、自己顕示抑制群、非脆弱群の 4 群に分類した。神谷他 (2013) は自己愛的脆弱性サブタイプと愛着スタイルとの関連を検討した結果、非脆弱群が安定した愛着スタイルを示し、脆弱群は不安定な愛着スタイルを示した。また自己緩和不全群が安定した愛着スタイルを示し、自己顕示抑制群は不安定な愛着スタイルを示した。

家族の研究として、児玉 (2016) は青年期における自己の葛藤と家族機能の関連について検討し、家族の適応性が極端に低い家族の青年は過敏型の自己愛傾向が強いことを報告している。家族機能を測定する尺度として、西出 (1993)

は FAI を作成し、FAI は 5 個の下位尺度 (「家族内コミュニケーション」、「家族システムの柔軟性」、「家族内ルール」、「家族に対する評価」、「家族の凝集性」) から構成されている。西出・夏野 (1997) は家族機能の促進要因である「家族内コミュニケーション」、「家族に対する評価」、「家族の凝集性」において、子どもが肯定的に家族機能を評価していると抑うつ感が減じられることを明らかにした。

本研究では自己愛的脆弱性サブタイプと家族機能の認知の関連を検討することを目的とし、以下に仮説を示す。仮説 1: 自己緩和不全群と非脆弱群は家族機能の促進要因である「家族内コミュニケーション」、「家族に対する評価」、「家族の凝集性」を自己顕示抑制群と脆弱群より高く認知すると考えられる。さらに、非脆弱群は自己緩和不全群より上に示した 3 要因について高く認知し、脆弱群のほうが自己顕示抑制群よりも 3 要因について低く認知すると考えられる。仮説 2: 脆弱群が最も家族システムが硬直していると感じ、自己顕示抑制群は、自己緩和不全群と非脆弱群より家族システムがより硬直していると認知するであろう。さらに、自己緩和不全群のほうが非脆弱群より家族システムがより柔軟であると認知するであろう。仮説 3: 脆弱群が最もルールを厳しいと捉え、自己顕示抑制群は非脆弱群と自己緩和不全群よりも厳しいものと認知していると考えられる。さらに、自己緩和不全群のほうが非脆弱群よりもルールが柔軟であると認知するであろう。

II. 方法

調査対象者 愛知県内の私立 A 大学の学生 177 名 (男性 26 名, 女性 179 名) に調査を実施した。平均年齢は 19.98 歳 ($SD=0.59$) であった。

質問紙の構成 NVS 短縮版 (上地・宮下, 2009), FAI (西出, 1993), フェイスシートから構成さ

れた。

III. 結果

因子分析の結果、NVS 短縮版では 4 因子が抽出され、FAI では、3 因子（「家族に対する評価」、
「家族内ルール」、
「家族内コミュニケーション不全」）が抽出された。各下位尺度について α 係数を算出し、内的整合性が示された。

自己愛的脆弱性サブタイプを独立変数、FAI の下位尺度得点を従属変数として一元配置分散分析を行った。その結果、自己愛的脆弱性サブタイプの主効果が「家族に対する評価」($F(3, 194) = 3.10, p < .01$) と「家族内コミュニケーション不全」($F(3, 194) = 5.62, p < .01$) で認められた。さらに Tukey 法による多重比較を行った結果、「家族に対する評価」は自己緩和不全抑制群が自己顕示抑制群より有意に高い傾向が示され ($p < .10$)、非脆弱群より有意に高かった ($p < .05$)。「家族内コミュニケーション不全」は自己顕示抑制群と脆弱群は、自己緩和不全群と非脆弱群より有意に高かった ($p < .05$)。

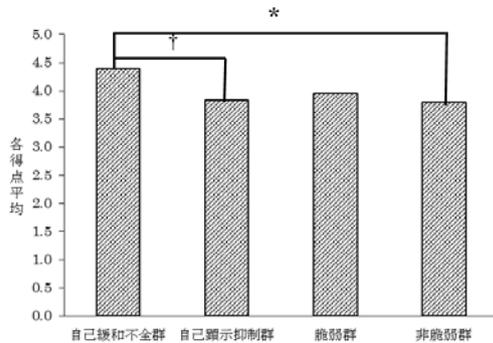


図 1. 自己愛的脆弱性サブタイプにおける「家族に対する評価」の多重比較結果。

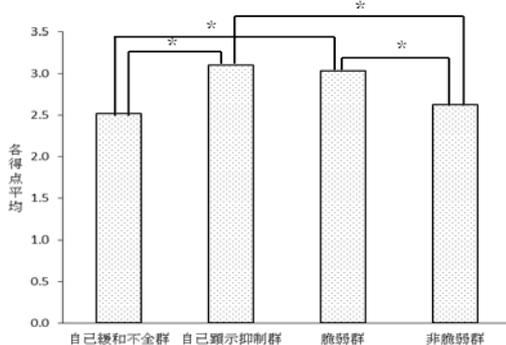


図 2. 自己愛的脆弱性サブタイプにおける「家族内コミュニケーション不全」の多重比較結果。

注) * $p < .05$, † $p < .10$

IV. 考察

FAI の因子分析の結果、3 因子が抽出されたため、仮説の修正を行った。「家族に対する評価」は仮説 1 の関係を採用し（仮説 1）、「家族内コミュニケーション不全」は仮説 1 の逆の関係となる（仮説 2）。仮説 3 はそのまま採用した。その結果、仮説 1 と仮説 2 は一部支持され、仮説 3 は支持されなかった。

自己緩和不全群は自己顕示抑制群と非脆弱群より家族に対して評価が肯定的であり、自己顕示抑制群と脆弱群よりコミュニケーションの疎通性が高いと認知していることが明らかとなった。自己緩和不全群は抑うつを自分の力で緩和する能力が弱いため、家族を理想化し、現実以上に肯定的に捉えられた家族成員との関わりを通して、心理的安定を試みていると考えられる。家族とのコミュニケーションの疎通性については非脆弱群との間に有意な差はなかったことから、自己緩和不全群は適応的であると考えられ、自己緩和不全群の健康的な側面を考慮する必要があることが示唆された。

自己顕示抑制群は自己緩和不全群より家族に対して肯定的な評価を持たず、自己緩和不全群と非脆弱群よりも家族とのコミュニケーションの疎通性が低いと認知していることが示された。自己顕示抑制群は強い恥の感覚や家族成員に対する共感的な対応の希求が抑圧され、家族に対して肯定的な評価ができず、家族とのコミュニケーションの疎通性が低いと考えられる。家族とのコミュニケーションの疎通性の低さは脆弱群と同様であったが、自己顕示抑制群は家族成員に対する共感的な対応の希求が抑圧されているのに対して、脆弱群は家族成員と親密に接したいと望んでいても、親密にできないといった両価的な側面が推察された。

自己愛的脆弱性サブタイプによって、家族への評価や家族とのコミュニケーションの質に違いがあると考えられた。しかし、推測の域を出ないため、自己愛的脆弱性サブタイプによって家族システム機能の認知に質的な違いが見られるのかを検討する余地があると思われる。